

拾魚人七才と内

十

松野勝院

南總里見八犬傳第九輯卷之十

東都 曲亭主人編次

第百十回 妖書の辭仁妙真小辯別を

却説大江親兵衛ハ濱路姫の鬼病の下。まうち听一より毫も礙議。遂即守城の勤番と自餘の三士干景能。小儘。一。遠く身装して立歩んとせ。折ふ姥雪與四郎。悄語くちう知らざる稻村より。倭猛。お召ませや。我青海波。お乗走らす。每在那里參そ。翁然あす御用。おわね。寛ふ出で來ゆけ。因て馮心ひひなつて。それ我身富山と申す。憶至。統轄暇されり。また大母。お對面せ。今番稻城へ参りとも。お伏留置れん。候是申亦知。えど。乞食。更ふ又。考も不樂く思ひれん。我豫寫措。消息一通。茲在り。翁龍田。退日。這消息。天母。見せ。よと告て。慰勞ひ。且今火急。君命を稟て。言私。及。忠臣の本意。

据あふもね。平信半疑決断矣。氣も御宿館山の兎黨が玉の光を撲れ。轉倒氣絶
ありと叫け。或所以そとんべく。汝濱路が枕方ふ近づきを欲せば。權且玉と我貸せ。責
こあらわす。汝濱路が枕方ふ近づきを欲せば。權且玉と我貸せ。責
子の下ふ埋措。亦效をも亦試てん。然べどそ件の土中ふ久く埋措をあわせ。那物怪の對治ぢ
ま。濱路が病着癒り。食事ぬきて返せべ。這一椿事。我意あらば。婦女と毎の云々と願ひ
とも大人氣。と思ひ。談考の三日。且まう靈玉と土中ふ埋措れり。數くの借り。も
あまん。然び坐席を擇。紫縫濱路が枕方とも。便宜。僥倖して宿直をせ。とられて親兵備阿
と矢うふ答難。沈吟。肚裏か思はず。あの靈玉は我身と俱。親の胎内。在り。一日より。自
然と得る。宝貝。あれ。牡鹿の角の束の間。人ふ貸せ。爲め。君命。争何せ。愁不姫上。お
枕方宿直。外様の譏誚を受へ。優。も。優。も。尋思。頭と抬。稟。御談の
ど。あれ。ひきよ。ま。如く。這靈玉。生れ日。よう片時。身を放。空氣り。祖母と年來脚扶持の下。口置。御恩を
あ。思へ。献つ。とも惜。况。一霽時の御用。姫上癒り。あま。埋措。一。乘詔。ま。う。項。ふ

右。まのう。ひら。まちで。きらきのせ。う。
樹。護身囊袋と用ひ。玉を拿み。懷紙。載て恭く。まを。う。う。
え。まのう。ひら。まちで。きらきのせ。う。
侍。近習門。火燈燭。秉て。件の玉。左まの石。ま。一霽時。見。勝。奇妙の美玉。栗く
自然と仁字。あり。奇也。妙と嘆賞。鼻紙。臺。香匣。表。收め。臺。登。奥隸の兎黨
某。申。と。遠く召。玉と埋。事由。解示して。宣。す。這個玉。香匣。共。一箇の壺。病れ
ま。う。ま。う。ま。又。壺。瓶。藏。濱路。姫。臥。草。下。玉。土中。穿。二。天。許。今宵。遠。埋。措。ま。う。葉
ふ。ま。え。西。固。と。泊。奇。貨。多。が。芻。困。と。碎。ぐ。な。多。事。と。做。裏。ま。濱路。病。牀。外。移。と
埋。折。我。報。よ。我。み。う。見。秋。金。食。者。と。ヨ。取。食。合。快。々。せ。ま。分。付。件。の。玉。を。遅。與
來。の。奥隸。の。兎黨。の。う。る。果。退。り。登。時。義。成。主。又。親。兵。衛。不。宣。至。見。今。浴。歩。く。玉。を。王
よ。事。救。正。濱路。臥。房。邊。案。内。ま。る。の。あ。ん。折。宿。直。せ。ま。か。と。町。寧。小。課。主。親。兵
衛。秋。を。稟。を。遠。侍。退。り。倭。一。程。義。成。の。天。吾。嬪。前。今。宵。大。江。親。兵。衛。一。騎。館

まある　き　と生うき　あよまつま　かのれのまく　く
山の城より來ゆ事及守の所望を憲へ。那靈玉と貸あを。御高ふ異人の教へ。埋措さへすも。
みまつて。よろこひ。おとさめのひ。とさめのひ。あいべゑ　きー　まへ　まきびも。さうきもぐくま、
昊ふ神はあひて。お教び大々き。恥て専婦使を。親兵衛ふ果子を賜り。又美酒と餚數種賜
そ。疲勞と慰め。程。夜の刃の時候。おきりけ。浩然。甲夜ふ靈玉を預けれる。奥隸の老黨黨を
そ。疲勞と慰め。程。夜の刃の時候。おきりけ。浩然。甲夜ふ靈玉を預けれる。奥隸の老黨黨を
ま。あんべゑ　ひう　のぬえうぶ　つれ
來。親兵衛うち對ひて。大江生。ま。徒然かづん。難生を奉りて。靈玉の埋果す。館の私がらせ
ま。みそく　ひう　のぬえうぶ　つれ
きて。亦う。うせが。心安く思ひ。因て五の君。既ふ前集ふ。あん臥草と故のどく。做。ま。り。今宵
そらう　とあいつまう
うちか鼻近う。宿直と付せよ。と。御説。卒ゆ。案内とせん。うふ親兵衛異議も。开ひ。承り
ま。あ。う。あ。ゆ。も。ま。ぢ。も。や。ま。ひ。ゆ。つ。ま　き
ゆ。あ。う。が。參り。ひ。れ。と。答て。躊躇。共侶ふ。濱路姫の病の狀。次の日ふ。來。受けられ。給事の老女が迎て
こゝひ　よ。う。れ。む。そ。を。免。あ。べ。ゑ。を。ま。ら。ひ。ら。ひ。き。う。ひ。じ。ま。の。り。さ。り。あ。み。す。く。ふ。く。ふ。管
今番の夜務と。勞ひ。ま。當下。親兵衛。濱路姫の病惱。輕重及物怪の障の有無と。云。と尋
う。く。ひ。と。こ。く。ひ。と。こ。う
れ。老女答て。姫上。黄昏時候。帝一。と。ば。厭鬼れ。ま。ゆ。の。と。身。の。館。出。る。來。ゆ。と。ゆ。ま。後。れ
然るゆ。只今睡らせ。と。答る間。看病ふ。通夜と侍。婢妾们。幾名。欲。親兵衛。と。物
ひ。ま。ち。よ。き。や。ア。ゑ。と。み。む。ぎ。ぐ。ひ。も。あ。ん。べ。ゑ。と。の。も
隙。よう。偷。看。ゆ。ゆ。其。聲。年三十可。身。出。て。親兵衛。と。對。面。來。け。左。右。ま。程。短。夜。え。れ。

窓の隙より亮眞て。庭の雀の聲も。時候親兵衛の暇を賜り。又奥隸の甘畠。引れて罷出しが
館内を編す。食をりて休息所と定め。這里まで早飯をたゞぎども豫臥簾草も儲てあり。書の勤務
も身負ふ。權且睡臥の如く。給仕兒們の薦るまふ。躊躇枕ふ就け。倭リ程か。燒雪與四郎。
四郎の第五輯。四郎とある。本輯と。世を興ある。あらゆる所。あらゆる後。あらゆる詳。
ある。自己の五刻過る時候。親兵衛が伴當の後れを。廝俱して稻村の城。來まけれ。堀内藏人貞
乃。東六郎辰相奉りて。向注所ふ召登。則幽守の仰を爲て。富山以東の賞と。白銀五十枚を
賜り。龍田退りて。宅眷们を慰めて。在留まべ。月俸。の餘の賜り。大田小文五郎。親文五兵衛の例を
り。那里を死ね且元。且妙真。ふ對面の折。今番大江親兵衛と。館山より召來して。當城。在勤の
事の趣を告知して。宣く他を慰むべ。と仰示。まやあひ。が。與四郎の大。よし。君恩と。辨。賜。と。愛と
そ。退ひて。親兵衛と尋す。他。昨夜宿直。疲勞れ。天明て後。未睡。就寝。成。まづ。見。まづ。
え。が。敢。又。駆馬。ま。昨日消息を。遡。與。されて。おれ。より。听果。う。あ。這里。も。時。を。寝。ま。要。ま。異
を。まき。よ。め。日又來て。對面せん。と思ひ。あれば。親兵衛の伴當を。留置。も。身の伴當の。を。領て。龍田を。投て。そ。

け。是より先に義成主。田税力助逸友と使价として瀬戸の城遣て。大江親兵衛を召ませ一事。那
夷の夜勤の事。且親兵衛が宿直也。昨夜の物怪顕れ。濱路姫の内夜も。睡スルをめり
まじ。遠き先父義宗主へ送えあはざる。奈良の親兵衛未牌の時候お起也。與四
郎が奉厚。且白銀半枚と賜り。休息の爲瀬戸城遣され。と傳せ。飲ぶと斜ら。脇て
浴湯。休梳り。夕饌と賜る程。君侯成及夫人前より宿直衣と平生服と必需の調度ま
皆具て賜り。親兵衛の寵恩の隈を畏も。ち然びと宣せ。姑且て義成主。親兵
衛をよそ。昨夜の宿直處。ち功あり。欽びと云々と宣ひ。義通御曹司。舍第次
九と共居。嚴君の左右不侍り。而て親兵衛が更毎功を褒美。茶と賜り。果子成
賜り。過ぐ館山の事。うち譚らべて奥の外。親兵衛が長日の廻るを嘗て慰め。目
めある。思ひける。却説の日も暮暮けれ。親兵衛。又濱路姫の臥房の次の間の宿直を
え。今宵も物怪顕れ。濱路姫の今朝よそ。面色も光澤す。心地清々と覚る。白粥を

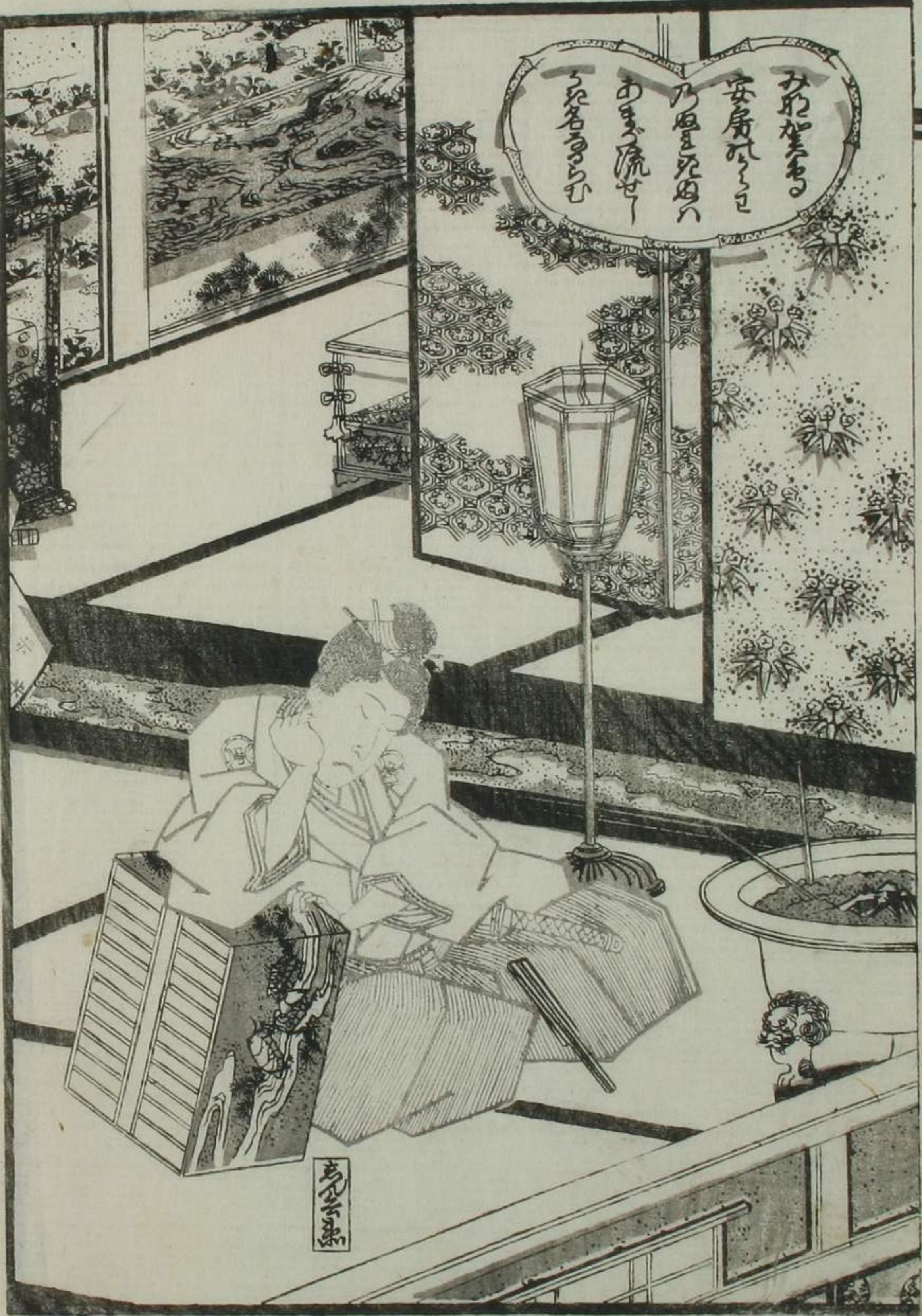
食ふ。西番茶及び。吾婿前然ひ。今宵大江親兵衛と夜勤の女房们。東西を賜へ
あと。午よりの議と命せられ。赤豆飯。煮深物。剛髮。尾魚の塩炙。石決明。膳膊。京濱防風。醋
茹蒸。果子餅など。五六箇。折柄。装做。その甲夜。賜され。婢妾们。欽びて。先親兵衛
分ち。薦め。各々賜り。芽出。今宵と。思ひける。倭うけれど。親兵衛。暮るより早る。端然
とて外観せ。婢妾们。稍狎れ。ぬる被る。もゑふやねど。縄ふ。応ど。の三要され。這方
より。のひと。うけ。あの次。日。瀬戸。老侯の使とて。蟹崎十二郎。照文。稻村の城來て。筒
様筒様と御意。ゆく。親兵衛が夜勤を。勞う。鉛茶と乾果子。両壺と。賜り。且五の君病
着の稍瘥。せあゆ。欽び。う。義成。あ。笑。と。語の次。物怪退散。あ。欲思ひ。倍生
ね。親兵衛の東西。たま。せ。欽び。云々。と。夢。を。の。語。の。次。物。怪。退。散。あ。欲。思。ひ。倍。生
濱路が。容體。恁。と。解示して。是。ま。靈玉と。親兵衛。奇功。是。等。の。よ。と。嚴君。詳
稟せ。と。躬て。暇。と。賜ひ。ふ。れ。照文。退。て。又。親兵衛。の。對面。の。折。真。の。差。を。再。會。を

候事の情又與四郎の文五兵衛が舊子舎を賜りて音音と媳婦們と兩個の孫と俱住
介妙真を置き入舎と檐と見て僅か壁と隔るのみ旦夕送ふ交加但れ、詞敵の言ふはうを告知
候せよ。親兵衛の心もあらず左も右も我二柱の君恩をと稱へ。今番又思ひけり老侯より
ものゝまへ東西賜せ。あの秋びを烹へぬ姫上のトモ塗可である。お折暇をありて見參みそ入るべ候。このお
てるきにえつれづれのもひととく。親兵衛の心もあらず。左も右も我二柱の君恩をと稱へ。今番又思ひけり老侯より
照文あらゆて別を告て伴當と俱へて瀬田へ退りけり是よりて濱路姫の病着ゆき平定へ親兵
衛が宿直せり。總五日程ふ三ゝびの饌も生平からぬ氣力日無清幸あれ。ひまご日數を
経方があらねば浴湯結髪のあわせ。多く無能てぞとまへ。親兵衛が對面あゆむ。只他がりのひ
折かの聲耳とゆふの。遮莫那物怪の夢もむぐる。宿直の醫師奥隸の甲ひや。夜勤を
免一來あらぬ。親兵衛がお三初のひと夜に次の間の侍へよう。然がむん二親胞兄弟連のひと
ゆえ給事の女房們の。お一折び勇まぬひとく。書ひ雙陸歌骨牌貝合ひどとて長に日の徒然城
尉ゆまやせ。夜の亦物語讀む女房お源氏物語を讀へ。其も甲夜の程の三更。約莫二更の
事。

左側より曉るも熟睡。七時も覚ゑぬ。婢妾們の夜勤も大々的退け。枕方お侍りの二箇す
あら。甚ぞ心怠じて俱か睡りて曉る天を知ら。夢も間あらず。今程は親兵衛の宿直。七夜まぢ。
五君既あ寝りぬ。在し事も答。恩人あらず。空暇を賜ふる。自由を乞ひゆけれ。勤業急夜をす
間。至極氣に倦心疲れ。連りお恥と催せ。勉め。而して睡どと思へも。堪され。臂近す。雙陸局を寄
走。面杖衝て寝るも知れ。未だ一更時打ぬ。然が又義成王。吾嬬前も見る。息女達を申す。
まがおひきあら。おうとく。おうとく。おうとく。おうとく。おうとく。おうとく。おうとく。おうとく。
崎照文が甲斐州うち俱へて。是で這地を還り。鍾愛自餘の七個の姫上達り八人ふ増て慈愛
玉あら。通て親の情。今番物怪の祟。命危か。比不測の異人の示現あり。物怪の箇様。之の
怨靈とゆえ。大生す。衆徒よ謀せ。名曳が怨靈解脱の爲。水陸の好事を執り行ひ。且大江親
兵衛。館山の城より召奉ること。宿直を命め。す。終物怪鎮り。濱路姫のと事。病惱平定
を。隨即洲崎明神の社及役行者の石窟富山寺。峯上の觀音伏姫の墳。墓賽願の使

者遣後を志障尋あそ姫上命運長久を。日も祈りて一日より吾嬌前日もおもひ。義成
夕も夜を安く人定うち枕ふ就て睡り思ふとまづく。親兵衛が参りてよ。第七日とお夜を迨て。
何と多く寝苦さま。睡りながら短夜深く隨て胸うち豆だて平手だ覺め。あら濱路が病着の
更ふ危窮ふ及び。然らず矣入物怪立顯れて惱せ候什麼親兵衛のくおほん近習们を遣し。安
否と尋問矣と尋思矣。次の間あ卧房。近習某甲。喚覚えき邊く頭を抬げみ。否既ふ
小夜深て四更の土圭の方僅响て。懲る他們を遣て。向て伺てませるも。徒々這那人がさへ驚
走。事盡矣のまうだ。女々歩も凝ら心より暗鬼を寄せ。笑れもせ。悔かべ。所詮我から
離て。那男安否を探り知る。あくまでも度べ。と思ひかへ。横と撥遣り身を起して枕方房
腋挿の刀を帶て次の間ある紙門をす。推開して。幟首ふ有ける提燭を兼て行燈の火を移して。升を
携て。遙する。幾回独ら過て。奥と表第の間ある。圓の銷を推。家小思ふも。似去用意され。訝り
多く。找入り。濱路姫の臥房。次の間出來て。不あ。燈燭の光幽を。親兵衛が。這里不在。よまきく
懷。夾め。身も偷歩。臥房からゆき。那里は夜勤の婢妾們も。這里當番の近習們も。短髪
と。貪睡くて皆夢ふ。お知り。余程。義成主の單臥房から入て坐て。身を頭を傾け。
熟思惟。象。親兵衛が勝れ。身長。十六七。後生像。氣生年九歳孺子。貞。縦婦女子の
中ふ置くも。淫奔がうた。思ひ。我浅慮。形體と俱不。心。大人備て早晚。色情
起。約莫男あ密會。俱死刑。明。法律。明。斎。他們。情由。人知。我。許えど。咎
き。助けぬ。罪過。幸ひ。人へも。あ。方。僅。這艷箇の我。落。他們。與。主。

訝。は。そ。寝。一。霎。時。立。在。て。悄々。地。下。さ。玉。濱。路。姫。の。臥。房。を。男。女。の。耳。く。聲。を。う。廢。
堺。の。今。ゆ。ふ。不。う。も。あ。れ。退。去。ん。ま。象。程。弗。憶。く。東。物。あ。そ。脚。み。樹。を。又。訝。り。て。悄。と。拿。枕。
提。燭。の。火。光。ふ。照。く。づ。ら。と。テ。あ。ふ。是。則。艶。書。標。識。具。す。ね。ど。お。も。凝。ぐ。も。あ。濱。路。姫。む
迹。走。親。兵。衛。贈。る。義。成。主。勃。然。と。忽。地。坂。り。堪。ざ。れ。先。那。奴。们。を。推。並。て。互。殴。せ。ん。と。只。
管。ふ。惱。る。心。苦。し。乍。く。ふ。推。鎮。め。う。君。す。の。本。性。胸。不。深。念。ひ。在。曉。の。月。す。す。ふ。言。艶。女。間。と。人。共。不。せ。ト。と
か。う。ぎ。
懷。夾。め。身。も。偷。歩。あ。臥。房。か。り。ゆ。き。那。里。は。夜。勤。の。婢。妾。們。も。這。里。當。番。の。近。習。們。も。短。髪
と。貪。睡。く。て。皆。夢。ふ。お。知。り。余。程。義。成。主。の。單。臥。房。か。り。入。て。坐。て。身。を。頭。を。傾。け。
熟。思。惟。象。親。兵。衛。が。勝。れ。身。長。16。7。後。生。像。氣。生。年。9。歳。孺。子。貞。縦。婦。女。子。の
中。ふ。置。く。も。淫。奔。が。う。た。思。ひ。我。浅。慮。形。體。と。俱。不。心。ま。と。や。大。人。備。て。早。晚。色。情。
起。約。莫。男。あ。密。會。俱。死。刑。明。法。律。明。斎。他。們。情。由。人。知。我。許。え。ど。咎
き。助。け。ぬ。罪。過。幸。ひ。人。へ。も。あ。方。僅。這。艶。箇。の。我。落。他。們。與。主。



よき

文藝堂



人傳し耳卷一

八

文藝堂藏

親の恥と捺滅をよび。濱路左まれ右もあれ。親兵衛世を寧ま。豪傑の氣質あり。且ハ大士の一人
ぞ。自餘の大士が先もて我に仕て。西番大功あり。若きふ思案の外俗もは。這情慾の罪咎。
可惜大士ふ疵を附て。後世までの迷惑。所詮中計。義を遠離て。他们が怒の醒。折召返索を
あざうまき。まづか。あた。とある。とある。主意決り。枕方ふ置ひ。提燭を手引ひ。件の艶簡と椎因。燭燭
上ふ翳り。發と起分。灰と共ふ提燭を手吹滅。遠く燈遣。腋挿の刀を又枕方。刀架
鐵耳。ゆき。枕ふ就ひ。寛仁大度の賢君子。竟ふ睡。明る天を。今くと復寝の床。不娛。天涯
を。みるけ。倦而。詣。義成王。親兵衛を召。近着。左。右。近習退せ。寢。濱路。病着
を。よ。あわき。な。あ。あれい。き。き。物怪も。退散せ。ゆき。夢。那靈玉の奇持も。あん。濱路。ゆき。浴湯。せ。病
瘡。物。在。本復。及。今日より夜勤。免ま。就て。我愚。あり。汝。仰。時。伏
牀。在。と。既。本復。及。今日より夜勤。免ま。就て。我愚。あり。汝。仰。時。伏
姫の靈火の擁護。かよ。富山の奥。生育。被。閑の東西。諸國。遠安房。上総の地理。す。知。さ。所。豈。あ。且。自餘の天。年來。沐浴。所。在。を。索。ひ。父。具足。せ。ま。參。か。と。幾回。

李上使爲急立去。寛く還るを妙とぞ。然ば汝が秘藏の玉を今返去竟詰義也。不善人瀆
路ハ年々徵牀せ。且汝が這里不在をもて。復物怪の障りあるが何をも。不禳んや。縫波在ち
ぎとの玉を那修埋措矣。妙障尋るをあべ。在無心の至り。汝も汝がから來ゆるまで。那靈玉を我
預け。知らうど二重瓶ふ。藏せ。土中ふ瘞れ。火災火盜賊の患ひ。权是ハ納戸財富を盤
纏の與ふ取るを。意のみよ。叮寧す。情語を示して。黄金百両紙ふ。色を折敷不載せ。ともも
食牛牛與へ。親兵衛は遠く膝と找め受載。身を退く。而毫毛無。御説の趣辱。都で
羨り。微臣一人。七大士先もて。僕まふ。御恩を画する。實不本意。ひど。御京老侯の
脚危難。富山出拯ひ。まつり。素藤對治の事。ふ。憶を。紈袴ふ。敷かれ。心苦く。ひづ。ふ。
今遊麻歩。與余身の暇。賜て。自餘の大士们を俱て。歸参れ。有教命。寔是本臣。若幸ひ。况路
費の金と。御親賜。羅恩。狼狽。隼身。あまく。壁と取。ふ物も。感涙の外。又。靈玉
の。も。既に知る。年來奇特。ヨヌれば。大の身の護ひ。と。君の與。一命を獻る。も。辭

夷々然と矧那玉。御用。少達。是亦幸ひ。微臣。參。惠。埋。措。セ。ア。ト。キ。今。日。啓。初。仕
人。勿論。大母。久。月。來。俟。ヨ。び。人。と。あ。て。その。修。別。れ。其。後。の。歎。を。不。便。一。而。妻。時。當。田。
立。寄。可。祖。母。妙。真。小。對。面。而。徑。詣。登。足。任。を。見。と。許。き。か。ん。を。と。宣。示。其。義。成。王。沈。吟。セ。开。り。
亦。餘。議。起。ひ。多。少。當。田。不。逗。留。モ。妙。真。小。對。面。セ。ア。キ。退。キ。佳。と。セ。光。侯。夷。別。人。そ。り。
俱。一。身。美。便。宜。不。傳。セ。ト。快。多。退。步。と。身。暇。と。賜。ふ。不。然。親。兵。衛。阿。佐。登。明。賜。の。金。懷。攸。セ。而。膽。立。鳥。跡。と。獨。春。
之。あ。る。方。そ。快。退。ひ。ね。と。仰。親。兵。衛。阿。佐。登。明。賜。の。金。懷。攸。セ。而。膽。立。鳥。跡。と。獨。春。
春。の。池。庭。の。嫋。垂。葉。の。樹。下。蔭。暗。ク。ぬ。身。不。疑。ひ。の。而。惟。名。松。木。菖。蒲。雅。墨。画。の。松。戶。推。團。廊。下。よ
モ。退。ひ。余。程。ふ。親。兵。衛。阿。佐。登。明。別。を。告。げ。モ。猛。可。不。仰。を。宣。伝。
矣。龍。田。赴。く。と。之。を。知。と。併。當。門。を。召。下。セ。青。海。波。の。馬。を。牽。と。二。の。城。門。を。發。程。ふ。肚。裏。思。

よとのをせとく
えがあひけふきん、おまぢらうつた。それを
きう。今日君侯の仰そ左も右もあらぬ那物怪の退散と。濱路姫の病着の稍瘳のひぐら宿
直の役を免され。去處死の多く。入館山へ返まれ。刺猛可の遊歴せよ。身の暇賜りて寵異の大要の
宿所あす。一日も逗留モトキ。と枕をかひ。故もぬべにぞか。言が生じゆども。お我を疑ふ。追
放ちゆる。然びと身を取。毫忽も免疑ひ。受へて覚ゑゆる。餘の大士が先を。大功もやうと
至る更ふ御門が立入り。婢妾们と列ふ。夜勤を仰付れ。と媚一と鬼倭人。が詭言をあらわせ。君侯の素
より賢明を。倭便利の小人。と信。容れあづあくねど。衆口の金と鏹。市ふ三虎。致をと。古人の常
言がある。功成り名遂て身退く。是達人の用心。生涯無異の捷徑。誰も知らずと。多く。俸
祿富貴を貪り。退くことを忘る。と。獵禽盡て狡兔。高られ。輩家亡びて。義経詭死を。榮枯得
失。今昔一致。あはせ駢く。足みな。我里見家ふ仕へ。三十餘日。過去。を。上總の館山。家
城頽け。れの。尚一撮。あ采邑も。坐席格式。一と。定め。れる。タク。那折。よ。と。兵權。二時ふ
家と。いま。の。多々。不。ふ。ぎ。事。び。れ。一。ら。や。考。あ。ひ

も。告知。ひづか。咱。併が年來ニ柱の。死館を受。まつて。御恩を聊。返す。鬼と思へ然。身の幅の廣に世
界ふ。天と。海と。孫。曾思が。又。親の。よま。胸ふ。浮れ。ぬ。泣。ま。を。泣。老女の愚痴。あん。你の
與。夫外。大父様。覺えて。や。行德。故の古那屋の文五兵衛翁。今まで存命。も。愛。う。ぐ。と。歎れ
ん。苦海。愛河の。世。定。ゆ。弘誓の船。遠。は。別れ。も。住。ま。假の宿。と。知。ま。返。ら。人の
から。う。死。傍。像。身。あ。え。ば。哺。親。兵衛。ひ。益。見。れ。思。へ。你の。圓。影。幼。緝。貌。耗。など。
を。ま。す。ら。
鼻梁の。と。よ。く。融。り。特。ふ。眼睛の。清。す。る。房。ふ。肖。う。け。又。ゆ。の。そ。て。笑。折。小。片。獸。齒。見。ゆ。く。阿
沼。蘭。ふ。肖。う。四。個。の。親。身。父。さ。へ。母。さ。へ。外。戚。の。祖。父。さ。へ。黄。泉。の。行。客。と。き。そ。五。稔。六。稔。の。今。日。ま。で。残。る。我
あ。み。ひ。ち。あ。る。く。や。あ。く。え。ん。く。ら。く。や。あ。ん。あ。い。あ。ん。べ。
這。身。單。ふ。思。ひ。難。む。哀。歡。苦。樂。遣。る。瀬。も。免。ひ。恩。愛。の。噩。噩。ふ。と。と。ひ。く。せ。又。替。然。と。泣。沈。身。親。兵
衛。然。そ。と。慰。心。め。そ。て。目。數。瞬。た。鼻。ぎ。うち。を。ま。や。と。大。母。様。余。思。召。を。お。歎。於。理。ふ。毛。ひ。氣。我。身。二。親。を。
喪。ひ。ハ。僅。而。四。才。の。比。ク。と。よ。名。を。の。知。れ。と。面。影。と。照。キ。よ。鏡。水。鏡。深。懷。と。汲。て。之。冬。も。母。と。大。父。と。下。
見。ま。れ。死。身。の。三。益。る。悲。泣。忠。心。と。屈。て。病。を。煩。じ。ひ。そ。と。妙。真。頭。を。抬。げ。然。也。々。余。ぞ。嘆。

志也

別逢今
難禪一
連語派
連一相



おやう。自由にござる事無。况往日稻村様の這里へ凱陣され、折咱脩と近く召され、俗の武功を譽美を玉
あらう。自自由にござる事無。况往日稻村様の這里へ凱陣され、折咱脩と近く召され、俗の武功を譽美を玉
か不まうるまがくふいまへ。そまへ。そまへ。そまへ。そまへ。そまへ。そまへ。そまへ。そまへ。そまへ。
先。まく白銀巻絹と賜りれど。そつて使ひで今ふ有るぞか。然るまも金何せんと推辭を親兵衛危萬
や。开ひ然るゆも仕えんが船纏またハ盜賊の殃危と惹く媒外見。始早く預けをもん攸も置のり。と
みまうえいをとふ。あづくわ。うけと
ひふ妙真固辭難て。彼々金を受食りけり。登時親兵衛窓うち仰び。日のひと永く時候をも憶
よ。時を移へ。久々。酷く敷發左ても右ても盡せぬ名残身の暇を賜るべ。とひふ妙真含泪て等ふ等々
おも見ても切て一宿留めせむ。世ふ武夫の沿習と。苦なる仕途是。要。又原の船長の母と喚れ
んを。倒木樂一か。べれ喃親兵衛今宵出船ふ棄るやあく元戦船來まし。と向て親兵衛阿吉。お
答難。方の仕方那濡衣を乾せりき。安房の浦邊立つて。寄る白波へありとて。我還る旨意のをと
る。累りゆる然氣と見せ。沈吟する頭を抬げて。然て今より去向を料る。其義重更に隣國され。往還輒
くひ元。但大阪の在處。速く知れ。日と過ぎ。狭遅遠。定められ。然て。歳月と累るゆひ。寛ふ等
せぬが。とりひて刀と極拿きて。衝建て。身と起せ。妙真。やく人を涙と俱ふぞ。やかみて。端近う送り

當處を訪れ。親兵衛急ふとぞりそ。否。乘馬。
まもあある。你は萬事不心術の神であくわす
きぬあらん。やまえみくわ。そりよまえ。
の食慾是ゆる山踰海川の津ふ小心參よと心を
震て善きから來日を考へ復見參ふを乞ふ。
愛も情も厚永解て流れてゆく水との往方
第百十一回 玄妖尾庭小衆先と聚ふ

は。伴當兵を訪ね、親兵衛急ふとす。否。諫止。併當兵正門を壇城に置き、妙真領にて、不までもある。你は萬事心術の神をあくべりあひゆ。初旅兵が心むとる。餘の兵士達は環會せ。且々の食物足食の山踰海川の津ふ小心あれと心を屬さず。親兵衛の一議及び諾ひて升りあひゆ。みだる愛子を恙あひながら東日を望む。復見參入文院とも答。隠呂の巣を名残り。血筋の誠親の又親子れまこと。まことに。愛も情も厚く解て流れでぬく水との往來の定め。盈虧を迷ふ鴻を光る夜の鶴より哀き。又子あ。愛も情も厚く解て流れでぬく水との往來の定め。盈虧を迷ふ鴻を光る夜の鶴より哀き。

第百十一回 素藤夜舊城と襲ふ

却説大江親兵衛。祖母妙真ふ辭り別れて城の正門まで来る程の路後れる二個の伴當が折りよ。这里まで赴着けり。是るより親兵衛の正門の守屋ふ立寄て那兩個の番卒ふ歎びを演うどして預けり。馬を鏑奴ふ。牽牛ぎら。乗へせとぞ。夜浦曲の下と縁よ一町許。伴當門をす。若翁ひとき知るべ。我の今朝哨を。君命と稟され。單他御赴くへ候へ去向ふ。伴當あつて。倒小官がた因て若翁三名叟。

六朝書卷一

卷之三

天の瞬間。晴曇るより猶果敢る。抑我身昨日もぐ。數百の士卒。將どと。館山の城主り。ふ。今日
一僕身ふ從ひで。萬里孤客。ときあけり。そを憂るふやうねど。那靈玉。我未生より。自然と得る。寶貝也。
年來這身の護ある。主君の與えひま。傳情や土中。埋れて。又。死とのかづか。我命運も。王と
俱。長く光と喪ん。祥る。けん放。ふべえ。いつ歎心の慨。し。遣る方もろく思。折。忽然と。後方よ
き。光明颶と。冕や。て。投石。似。物あ。あん。項ふ礲。と中ると。そが。尽。衣領。より。浪蓬。九の命の
邊。住。と。親兵衛。嗟。と。駿。て。遠く。も。衣。内。ふ。入れ。櫻。榜。ふ。果。と。木。柰子。の大。さ。る。物。
只。一顆。背。あり。訝。り。み。ぐ。食。ゆ。て。ア。れ。が。あ。ち。別。物。す。モ。嚮。君侯。ふ。貸。ま。よ。そ。そ。
下。き。土。中。深。く。埋。置。れ。仁。の。字。の。王。そ。けれ。ば。あ。も。怎。麼。り。ふ。と。ぞ。う。ふ。一。び。訝。り。あ。や。又。一。び。欲。
び。ほ。ら。く。と思。す。嚮。我。這。王。毫。毛。も。惜。む。と。く。君侯の所。望。ふ。從。ひ。ま。そ。那。里。ふ。留。め。惜。だ。た
す。ふ。靈玉。我。を。慕。る。欲。二。重。の。瓶。三。尺。の。土。中。と。出。て。路。遙。る。我。懷。ふ。入。り。う。鳴。呼。神。多。欲。靈。玉。哉。姫。上。
病。着。癢。り。ゆ。ひ。て。物。怪。も。亦。鎮。り。れ。ば。這。王。那。里。ふ。要。う。と。伏。姫。神。の。神。謀。ふ。計。り。と。返。ま。せ。ゆ。一。終。

卷之六

卷二

あらそり。すんさん ちまきしまい。まろ
ううとあれ。
義成侍ふ隣をあひ。長狭郡神餘村へ他ヶ庵宇の地をそのそ那邊も。三百貫文の米邑を賜り天津
九三四郎後見と生涯を送りよと。諸役免除。本領安堵の御教書を成し下されれ。九三四郎ハ天より
飲ひ地ふ喜びて。國主の恩を拜まう。墨塗木彌。と神餘村より。幾程ゆゑく墨塗之介。宿所を
造り奴婢を使へせ。其身の生涯後見と。徐ふ光明を送りけり。是併。懸田の老侯并ふ當主の仁恕より
九三四郎が遠年來の疏忠の善報をえと。近にゆゑ。遠家ののも多便語續て。後まで善談を
たぢけり。墨之不九三四郎ぐる。おの下ふ詫ひ。又の恩赦の日。出来今復五郎。南弥六墜八の有司赦
めんうあめ。免かう。
免の義を示して。若刃がゆ一も。綴大赦の折。數多を犯大罪氣を。老侯の格外。御仁心を。すく
守ふ宣せ。ともあれ。都て命を助らる。上總かう。すまく思ひ。速ふ退り立ぬ。又這地ふ在まく。願ひ嘆き。一
月俸を賜り。城内不留置。異日り功あが。提立あべ。とあり。かくの間の罪人皆歎び。恩を稱へ額減
つれ。じまく。とれく。あるきと。御て脚説乗りゆく。富國。我們が舊里でひば。上総へえんとを欲せを。況り。後の露命。敷糸。月俸を
ま賜るを。願ひ。大馬の力を盡して。再生意外の供恩と。報ひ。おもんとを寧下けり。そぞ中ふ墜八の上

總か老母のひ。椿村かすを。親と慰めんと。身の暇と乞うて。有司候と。笑えあひ。が義
成主憐愍也。ひ。墜八が情願。九。西郎ふと。及さむ。是亦孝子の心。宣く路費を取せよ。仰示
まきかや。有司又。這仁政。轟び集て退治。僕のど。不徳。けむ。生來不復五郎。南弥六。當城ふ住
ると。許され墜八も。啓賛を賜。そ。椿村返。も。然。乃く者も住る者。轍の魚の江。還。枯る
萬葉。而。あ。幸。ま。う。取。と。然。と唱。長く良善の人。と。の。せ。今程。あ。墜八も。南弥六。生來。介復五郎。別れて
家路。か。赴。か。罪障。眼前。の。活地獄。ふ。懲りて。俠客の交を要せ。上總の宿所。ふ。遷。て。畔作の暇。ち
ど。毎。ふ。く。そ。の。母。ふ。仕。の。後。ふ。至。て。喧。も。喧。を。起。り。と。ぞ。倦。て。又。義成主。件。の。五。人。を。赦。免。の。朝寵
田。使者。を。遣。て。九。西郎。们。五。個。の。罪。人。を。赦。免。ま。る。事。の。趣。并。ふ。大。江。親。兵。衛。夜勤。を。免。て。六
士。士。始。に。本。を。詫。問。昨。日。他。史。遊。歴。の。暇。を。あ。り。よ。て。す。宿。落。姫。徹。狀。の。然。ひ。ま。懲。と。先。侯。ふ
報。も。う。義。實。主。を。听。思。或。教。び。裁。評。什麼。大。江。親。兵。衛。を。獨。然。と。使。出。只。今。猛。か。失。遣
あ。け。ん。あ。ろ。ふ。見。の。き。を。うち。唾。を。あ。ひ。先。照。文。を。見。て。よ。と。示。して。向。の。照。文。も。亦。驚。る。畢竟

意を忍びて他を稻村遣へ。義成主の事情を尋ねまつた。そつ然黙りけり。話
分兩頭。介程小暮畠素藤の軍人不入の山の庵を守と妙椿の還るを等と。件の女僧が先に
去る。約莫十有三四日を歷て。二月も既に盡る時候。朝妙椿。忽然とあり來。獨縁頬在り。
か。素藤駕を且然ひて迎れ。計り一事の成就ある飲食と向ば妙椿含笑で。惱りぬ言。問候。も
詳く告候。はしと思てか。素藤と。余素藤も亦うち笑。その馴れぬが。鳥の聲水の音耳ふ
き。友も遠今不の山守あ做りて等と甲斐あけよ。とが妙椿領て。然どよはあ豫て身小
事。未せよと。咱脩稻村赴て。法船をと城内あ城下を。竟か大江親兵衛。遠く他郷逐遣
らう。ものを段へ箇様々と。那假名虫の鬼。お濱路姫の厭鬼れ。遂に病着す。又役行者
と。未だ假異人の元現の事。是より館山の天江親兵衛と。お濱路姫の宿直。七日夜勤を
ま。す。その折那靈玉を病の牀の簀子の下する。土中へ埋めさせむを。説示して入安う。姫の病着差
ま。す。時候一夕義成が疑心を起すて。更闌で那身一個濱路姫の臥房不近く折次の間宿直を去

え。親兵衛が咱脩をと。その夜半より打聴りて。義成が他を不候。是第所行の那靈玉を。他を懷ふ
わすをと。土中へ埋めさせむ。故思ひの隨ひ易かる。倘玉を初びと。親兵衛が身を附である。か。
未よせん。段の妙うを思ひ。然而義成。姫の臥房中。是を悄語。聲を喰へ。且濱路
姫。親兵衛贈り。假遺艶簡と。拾ひ。義成怒り不堪。其件の男を推並て。多數をせ
ん。性起り。う。の折をと。親兵衛を結果。が愉快。濱路姫。殺す。ひ。身を與ふ妙う。ト
と思ふ。めう。林下難。ふ。義成が性と。短慮の猛將。立地。憲ひ復て。敢る氣を顕さ。拾
ひ艶簡と。懷か。來。臥房。還り。件の男。女の中と。裂いて。ひ。人所知。と。艶簡を讀。ま。す。
ひ。艶簡。と。懷か。來。臥房。還り。件の男。女の中と。裂いて。ひ。人所知。と。艶簡を讀。ま。す。
ひ。艶簡。と。懷か。來。臥房。還り。件の男。女の中と。裂いて。ひ。人所知。と。艶簡を讀。ま。す。
又。那回義成。夜深。單濱路姫の病牀。娶。折表弟と。奥の閑の戸の鎖。必固。も。輒く。も。用。輕
え。咱法体で。侍れ。も。義成。訝り。後。かの義を。糾。外居。是。亦。親兵衛が所為。す。と。

思ひよきん。這一條の遠くぬ。大隔昨夜の事か。ち詰朝義成の親兵衛を召近着て。ひまど招
ひふ心せざる。七夫士の所在を索む。俱して來よと。遊歴の暇を食すをすけ。瀧田の祖母の宿所
だすも。逗留を免まれ。急ぎ遂立ちられり。親兵衛の水路。其宵他御赴たる那奴が在るを
まへ館山城を更る。今宵一夜を過去。非除又年を度て。親兵衛がて來らるとも。那玉をさ
え。素藤怡悦の勝き。耳を敵は膝を枕也。听惚るに半晌。許憶も止息を吻。痴愛を尼夢
神樹柳館山の城を更復す。又是甚麼事。妙計ある。と問ふ妙椿。坐更も亦食飯をむる。
嚮ふ寄隊の陣へ奉れ。追放せれ。躬方の主卒願八金作本膳碗九及雜兵們。ゆうく當日副
門より落す。主卒も都て法被をそ。いゆ日より。這四ト。太山の酒を置。期不益。おの處喚聚
食ふ。易か。且前祝酒うち喫て。姑且俱ふ樂乎。酒菜の咱脩が準備。立六禪。庖湯。快
拿手。おも。おも。おも。おも。素藤訝ふ。速く身を起て。庖湯の板厨を開て。入れば果と興味平

め。魚丸或し首路鶏卵を。皆悉調理。立六箇の青磁の碟子。小粋衣做。てあひけれ。呆るをもぐふ
無く感。と。酒を温め。坐席へ鋪。坐つ處陳。坐安排。妙椿と共に。伊屋姫を遣り。モ
程。又稻村平。あり。も。听声を向れ。毛。醉て。俱寐の假枕。共。甚多。熟語。樂を涯さる。は。
左右方。程。不日。斜室下。晡。毛。妙。素。素藤。又妙椿。小歸山の城。と。復志。他策。と。向。催促。毛
登時妙椿。枕櫈。遣り。身を起。一霎時。外向。瞻仰。て。現今。好時候。やん。隊那。違。不潛。せ置。毛
は。躬方の主卒。喰。集。の。く。と。ひ。も。縁頬。立坐。て。貧。水。の。を。淨。口。漱。外。面。ふ。立。向。毛
眼。と。用。て。只。咒文。を。唱。果。て。躰。坐席。入。り。之。素。藤。ハ。その。あ。ろ。流。す。よ。某。同化。す。毛。い。あ。く。と
恩。の。具。不。外。百。長。視。と。皆。草。と。道。前。向。樹。の。間。巖。暮。り。毛。近。て。來。居。人。喧。
楚然。と。て。傍。え。と。善。れ。素。藤。が。故。隊。兵。礪。時。願。八。平。田。張。盆。作。奧。利。本。膳。浅。木。碗。九。郎。们。残
先。未。平。て。一。隊。約。莫。西。晋。名。葬。の。廢。祭。聚。合。る。身。皮。都。て。窯。果。て。一。刀。ざ。も。帶。ざ。り。素。藤。
這。要。入。き。う。見。て。躰。縁。頬。走。出。聲。と。機。先。願。八。人。不。對。面。て。別。後。の。苦。乐。と。喜。樂。の。願。八。

金作本膳碗九甲も四個の光先の言語脣一告をす。性日は我們の分を船に乗せられ。武藏或の相模の浦へ追放され。折八百尼翁法術を難兵奴隸ふ至るを。這頭は近在奥山皆悉領を返え。事は幻矣。水路を渡り來けり旅愁の雲ふ乗せられ。飛行して來けり飲食上焉を夢の如く。楚ち覺ふ。全然ふよろ料らす。僕這草へ返まれかど。太山見る。食物を。前徑と。行客。盤纏と畧き。欲す。身は寸鐵を帶されば思ふのミモせん。方やば。只草深た地方や山蛤の事。日毎各捉啖ひ。才小餓を洗ひて在り。行程が相合も亦。八百尼翁法術を。そし、這頭にて返ませ。這草庵小御座も。尼翁の示教よりて知る。まことに對面を許されね。間近に山が在り。此處を訪まつた。客恨が艱苦を忍びて尼翁の帮助を尋ね。今朝一も尼翁。稻村の城より出でる。さる。在下们が躲在る山陰に立寄り。妙術を。天江君術を。逐遣。事の顛末を解示され。傍れ。今宵館山の城を。復すと思ひ。下晡ある。時候。海達を。咸相恨ふ。咱等の尼姑の帮助。漏す。あらゆ。傍れ。今宵會体。羞と。雪入と。欲す。我はく。兵。大刀も。鎧も。やう。何を。一城の大敵と伐た。との間に妙橋の奥より徐ふ坐て。素藤あうち。對ひ。その武具の咱術。皇裏の館山の城内。大江親兵衛。剥捕。射方の鎧鎧刀鎗。今更。那城の兵庫。藏。今宵。先法術。と。开。咸。復。と。隨即夜。轂。用。然。が。咱。俗。の。年。栗。特。秘。藏。の。宝。貝。わ。鑿。襲。玉。名。け。る。這玉。と。風。祈。檻。猛。風。俄。頃。吹。暴。せ。屋。魯。復。樹。倒。效。驗。一。が。差。と。因。て。の。宝。貝。と。風。起。七。館。山。京。兵。庫。吹。壞。り。そ。那。武。具。を。う。復。す。名。黄。昏。か。先。や。效。驗。を。交。と。説。示。し。懷。よ。錦。の。裏。裏。攸。や。底。那。武。具。を。う。復。す。名。黄。昏。か。先。や。效。驗。を。交。と。説。示。し。懷。よ。錦。の。裏。裏。攸。や。底。襲。の。玉。名。食。す。て。そ。う。侵。異。方。ち。朝。額。推。當。を。念。て。一。霎。時。咒。文。唱。れ。疾。風。颶。と。吹。起。

夥家は矢毎不徇徳で。日の正しく。まち。か。口。今。尼翁。喚せ。ふ。と思ひ。隨ふ忽然と。都て這山來ふ。けれ。尋む。惄。見參。入り。一期の幸ひ。何う。是。優。走。毛。と。毛。甲。唱。れ。續。心。似。居。四個の兎黨。耳。聯。辯。の。拍子。よ。一五。千。の。話。説。素。藤。听。妙。感。て。今。ゆ。思。ひ。も。甲。始。よ。そ。も。尼姑の帮助。漏。す。あ。ら。ゆ。傍。れ。今宵。會。体。羞。と。雪。入。と。欲。す。我。は。く。兵。大。刀。も。鎧。も。や。う。何。を。一。城。の。大。敵。と。伐。た。との。間。に。妙。橋。の。奥。よ。徐。ふ。坐。て。素。藤。あ。うち。對。そ。の。武。具。の。咱。術。皇。裏。の。館。山。の。城。内。大。江。親。兵。衛。剥。捕。射。方。の。鎧。鎧。刀。鎗。今。更。那。城。の。兵。庫。藏。今。宵。先。法。術。と。開。咸。復。と。隨。即。夜。轂。用。然。が。咱。俗。の。年。栗。特。秘。藏。の。宝。貝。わ。鑿。襲。玉。名。け。る。這玉。と。風。祈。檻。猛。風。俄。頃。吹。暴。せ。屋。魯。復。樹。倒。效。驗。一。が。差。と。因。て。の。宝。貝。と。風。起。七。館。山。京。兵。庫。吹。壞。り。そ。那。武。具。を。う。復。す。名。黄。昏。か。先。や。效。驗。を。交。と。説。示。し。懷。よ。錦。の。裏。裏。攸。や。底。那。武。具。を。う。復。す。名。黄。昏。か。先。や。效。驗。を。交。と。説。示。し。懷。よ。錦。の。裏。裏。攸。や。底。襲。の。玉。名。食。す。て。そ。う。侵。異。方。ち。朝。額。推。當。を。念。て。一。霎。時。咒。文。唱。れ。疾。風。颶。と。吹。起。

毛砂を飛べ樹を鳴らす。奇特不駭く賊兵们吹倒され。と品出棟の各携り廻累りて頭を抬げぬ。けり。倭り一程未日へ暮す。這夜亥中の左側か怪び一風のまく算の筈尾刺々と音とて天より聲す。東西あり。その數幾百を知る。大家さと意中へ曉得と避て櫻者もす。隊東折れ去る。ふ。裏裏小親兵衛お剥れる。躬方の武具きはれ。衆兎都て妙椿の奇術と感せぬ者もす。先素藤の武具を尋ねて縁頬不登一置見。尔後各認得あるをかくそく擇令。鎧を擐ぐ。大刀を佩た。鎧を捉り。於りみどして腰ああうと金を以て。或は樹の根小尻を掛け。或は草を折布に坐て。飽生をうち啖。皆り。他們の墓田の隊兵。最も家號が相似る。蛙と食と考る。實亦是獅子身中の虫ふ等。若者と老いの名詮自性思ふべ。問話休題。尔程不素藤の黒草絆。口一縮して臂縛距繳。身成固め。黄金装の天刃三尺八寸。又。鷗尻を佩倣。刻室毫ヒ首と袖漆え右手。戰鬪を携ぐ。奥より徐々と出て。參縁頬不建を。發兒あ尻をうち掛て先着到を回さ。登時妙椿の素範。

夹衣小袖の尚巳の時。許身か黒鶯鵠絨の帶。前光結ひ。黒純子の袈裟表を纏て。故意法衣を着け。本白紋紗の阿高祖頭巾。最も目深から被り。某一口の戒刀を引提る。縁頬を立生て。願八盒作。人们不對ひ。咱俗違算の水。今朝より屢々加持られ。兵毎快ひ。傍人別。少々這水もて。兩眼を洗せ。急野子玉の鳥夜。も物と見ると明亮す。今日の四月朔。元が月を浴みて。不便。然すを。躬方の士卒们が。鳥夜も眼明や。猫兒の鼠と捕るも勝と。敵と較ぶる自由身。咱俗も墓田人と俱。館山へ赴ひて。悄々地の術を行へん。既ほそろ準備。ト。轎子。皆門が在り。雜兵们が。吩咐で。咱俗も乗せ。其事。とも。ひそう。驚かず。ひそひそ。みるよと。さと。あを。みるよと。さと。あを。ア。素藤星を瞻仰。時分今ぞ。兵毎立。快々找む。ト。下知。發兒を放ち。下立す。阿間。个。六。皆抜びて。先を争ひ。ゆくも。貰ひ。水。も。各眼を洗ひ。もの折風。既止。夜の子二刻の時候。ア。素藤星を瞻仰。時分今ぞ。兵毎立。快々找む。ト。下知。發兒を放ち。下立す。阿間。雜兵们が。背門。轎子を吊りて。座す。卒と縁頬。よ。昇寄られ。妙椿。駄て。うち乗る。と。拾起。ア。素藤の後。跟ても。俱。一。体。倭。而墓田素藤の。そ。隊の。賊兵。三百名。先鋒。後隊。隊伍を。

その。今もまだ余念。不思議見る。かび不思議見。ひどり。あく。あく。
整々頗る金作本膳碗九升。本膳が獨子。奥利狼之介出高と吸做す。今茲十八の後生们を
前後左右ふ従へて。山路を連り。不急をやく。と。間けれど。那水更。眼を洗ふる。效驗。見。衆兵一個
も後うらみのき。思ひ。よろむ。來て。館山の城の後門。ふ。推寄。ま。折鼓。ま。と。譙樓の太鼓の音響えそ
う。あよ。う。
丑の初刻。まよ。けり。詰表館山の城内。あ。日稻村殿。義成。の御教書到來。て。大江親兵衛。仁。を
あよ。そ。ま。せう。い。ひ。る。わ。う。と。あ。よ。う。ま。く。や。く。さ。と。ひ。か。と。き。と。
夜勤の役を免。ま。じ。七犬士を迎。の與隔。昨猛可。起行。と。ち。投方。遣され。是より。逸時良
鬼。あ。よ。ら。も。え。ま。え。だ。ん。ゆ。う。ま。き。ざ。え。
千景能。行。懇。ふ。館山。勤番。て。弥滋由。断。よ。く。そ。の。城。を。守。る。べ。と。仰渡。れ。る。件。の。三。土。を
參。う。あ。べ。ゑ。こ。こ。と。
訝り。よ。う。親兵衛。這里。在。よ。そ。守。る。よ。か。見。ゆ。う。と。眞。思。べ。懸。念。せ。を。躊。躇。義。書。を。ま。あ。せ。そ。
下知。を。主。卒。ふ。傳。う。そ。の。急。を。敬。警。め。け。り。傍。り。一。程。あ。の。夕。暴。風。吹。起。り。て。或。城。下。の。廬。舍。を。倒。て。或。
城。内。の。樹。木。を。覆。ま。風。の。勢。い。凄。く。て。現。平。々。及。宵。え。れ。ば。城。下。並。ふ。普。善。寺。蘇。利。の。村。人。各。戸。を
お。き。か。そ。と。今。
用。風。を。害。怕。れ。て。外。ふ。出。る。の。る。う。り。况。館。山。の。城。内。え。田。稅。逸。時。登。桐。良。干。せ。屋。景。能。们。く。士。卒。を
お。き。か。そ。と。ね。ひ。
敵。房。で。毫。も。睡。て。居。づ。け。ふ。風。は。ま。く。烈。く。て。這。夜。東。の。郭。ま。兵。庫。兩。座。許。壞。れ。る。よ。雪。え。が。ま。

あらまちともをどうなづか。よろしき。ま
秀城の士卒は惧れ駭に起ゆる。鎧擐る間もあれば各素肌と短鎗を引提或の弓箭を携て廻入る
敵ある。遂に齊一防で戦ふあり。如法闇夜の進退便る。敵の軍少も量り難く。賊徒の目子明
亮モ。鳥夜も迷ふ者ひ無く。又妙椿が幻術也。其勢數千をえり。敵城内が充满て鎧と立だ
地めあらが城の士卒の防禦がゆき。敵驚恐慌度を喪ひ。敵城外が充満して鎧と立だ
真先に找む聲高きが當城の奴們。まざ知らず我主音畠頭の相公。會替の恥を雪んと。當晚數
千の逞兵を領て當城を含む復しゆ。番士の頭人田税逸時登桐良干の那里に在す。命惜く而縛
車。降参せよと喚てくる。勢ひ潮の沸く似く。古昔の義秀親衛も。敵もさもやがけり。傍ア程
頭人田税逸時登桐良干。景能の夜轂入り。と呼す。もと兵員が身を固
め。刀鎗引提出烈しく士卒を罵励す。主齊一敵を拒み。瞬息間に幾人被早鎗下より刺伏され
て死ぬ。まことに。ひとあらえをうち。
敵の視餘る大勢され。素藤と擇敵す。せまく思ひ甲斐もあらず。各浅瘡を負ひ。這里を先途に戦
ふ程登桐山八良干の本膳碗九郎と左右を受て。連々戦ふ。大刀風が當る。もぎりけん件の二賊を

後より找む躬方お譲り引退く。吉良千と肩脱下と。焦燥の隨脚下身屍骸を撲地と跌たて。忽地檻と輒び久賊徒へゆかと幾人か推累して生拘り。云の折逆時景能一所不敵と柱えを高坐す。歩も退きず。ふ士卒へ過半數を捕られて。良千虜不意り。が心れをあくねども。逸時忙と尋思を起す。找む景能と椎禁め。惧る退ひて談考す。やそれ、郎吉屋生月。今戰歿をすよ。落城の不覺に償ひ。所詮命を免れて。異日、賊将素藤を狙撃する。其倒ふ忠臣は勇ある名を揚げ。先知殿の意見甚。麻子や。とひよ景能點頭て足下の主意寔余理あり。事一早の恥を忍んで。狗死を爲さん。丈夫の本意を。あくま。快落め。卒共侶ふ。と悄語ひ。鎧と脱棄て落る躬方の難兵の中ふ交りて。後門より出で往へ。一方も知らずり。然が。あの夜の戦ひ。城内の士卒都て五六百名僅不命を免れ。三百名が過ぎ。ある。它の賊徒が數を捕れる。血が流れ。盾と流し屍が積れて累を。慘而夏の天明。が。素藤と先士卒の城の四門を守ら。と。首実檢をあつて。宗徒の城兵田税逸時。並ぶ吉屋景能へ。幾回か落亡。なれど。あれと想ふ首級を。軍登桐山。郎良千と願へ。金作が隊ふ生拘り。重索櫓。難兵を牽へて

廣庭推居る當下墓田素藤の発兎不尻とも樹る左右史本膳碗丸郎以下の兎黨と侍
らして意氣揚々と面色ちう良干と化と見て爾ハ登桐山へ歎謹て我のすゝを聞け原這城地の我義
兵をも自然と得る所を義成城ふゆだ且我ハあの年來里見忠あり功ありふ義成敢そ義を
思ひ慢ふ我を侮りよ事遂に干戈を及べ御寧篠城を方折那大江親兵衛が幻術お眩惑せた
一旦俘はまくが我英雄と虚せざる天の恵神の助あり。故に義成が我を誅まと克へて士卒と俱く
追放も處さざり我入來亦我城を據まる。絶ぶ二十餘日内外を数千兵卒を聚合し會戦する
恥を雪める武畧が胆没れけ志を傾けて今より我を從ふ功あん折重く用ひ。惜くも我
と之せも果を良干ハ眼と瞳と聲ゆ立て。され素藤過言。余は原是刑餘の山賊曩奸計を
旋うて小鶴谷の所領を奪食するを惡近曾日露れより人食れを知る。况國夷恩小叛
矣。御曹司を捕りたり虎狼蛇蝎の威と振り。我神童大江が為よ若们兎黨數を盡して既不俘は
せれど大江親兵衛が意見をよて國。吾仁慈如來か等く首を續。ありよ。且虎狼の心よりて。

事今ち不及ふも國主の大軍うち向ひ朝日不霜の解る像く誰う一人も漏まふ。覓期とせよと勇士の奮
闘もきの。ひと身をねんづらえ。そちをもれまへ。そちをもれまへ。そちをもれまへ。
激思ひの隨ふ罵れ。素藤勃然と怒はる。堪び其奴甚姦化。先の舌を引抜む快きせよと敦園たゞ
妙椿芝で遽く屏風背も走出て素藤を諫る。良干が非礼過言。眞取憎むたぬとも怒ふ。衆
を殺すを要す。姑且獄舎を繕ふて志を改め。許く用ひか。終も歸伏せ。その折誅戮せれ
ま。兵每ち良干を牽立にて獄舎を數ふ。由断して令する脱ふ。と言語急迫した下知不獲。賊兵行
く。そちをもれまへ。そちをもれまへ。そちをもれまへ。そちをもれまへ。
九以下の兎黨皆く手ぬ堪を目注へ。ひそ憎と嗤ひ。憤と嗤ひ。憤と本膳碗
當り。報ひ。礪時願八平田張盆作。居まの難兵を徒々普善寺利の諸村へ遣し。篠山出
遣れる。兎黨の妻子へは。初城内不在。と在す。大江を管。年少く顔美ひ。咸金入れ。賊徒ふ
こちをもれまへ。そちをもれまへ。そちをもれまへ。そちをもれまへ。
這の賞を取せ。後堂を召入れて妙椿の使用を又只あの夕の至る。豪民を催促して戰粟軍要金



城ふ凶變あり。向近あられ。素藤が再叛にて。件の城を攻畧り。と。風設耳と。詰早甲し。惧ふぞ。知。駭く。天さる。素藤又館山の城據り。猛威を振ひ。嚮ふ我們が逸早く。幽主は進去。なれど。憎も必害もあん。今番は。稻村へ走り。あらて。吉の趣を注進。且。那里を在留。と。賊徒の害を免るべれと示し。合あう兵侶ふ。そろ日用。宿所。も。勉て路次とのを。と。這回を又。縮村へ注進の第一番。その忠告を賞せられ。則。他們が頼ひ。まよ。城内ふ留置。傍程ふ。外々。より。庄進。まく。雪え。又。館山。す。躬方の城兵の。數。漏まれる。百許名漸々。小脱れ來て。報る。と。听ふ。昨夜。墓田。素藤ふ。城と落され。事の顛末。城の頭人。登桐山八良平。生拘ら。田税。逸時。若屋景能。も。落亡。あら。戦歿せ。欲。ち。存亡。詳る。と。賊徒の。數十。天勢。也。郭内。雖。立。地。も。る。八面咸敵。そり。一。也似。ひ。ふ。と。繰入れ。第二郭。也。起り。立つ。も。音。せ。れ。が。城の。士卒。夢ふ。た。も。れ。を。知。も。是故。ふ度。喪。ひ。落城。爰。び。又。その。甲夜。より。猛風。起り。と。兵庫。壊。ら。れる。其頃。つぎ。また。口錯。さ。君臣。上下。驚。呆。既。評議。區。あ。あ。義成。主。昨夜。より。猛可。脚。多。具。衆。口錯。さ。君臣。上下。驚。呆。既。評議。區。あ。あ。義成。主。昨夜。より。猛可。脚。

疾ゆ。醫師們脈と胗き。おも脚氣か。隨即連ひ湯藥を薦め。ちよ折合せ。評議の席へ出る。先上總の諸城主。脚教書を遣せ。その書が載れる一个條の素藤再叛の變えある。各々先度の如く城を守りて勤く。此う征伐使として速く誅戮す。軍兵那裏に在陣の間、備戰米の所要あり。折下知を隨て。又本陣へ運送せられよ。と示さる。諸方へ急脚使者を下す。ひはりく。一當城より半遣り。傍て又義成王。杉倉氏元。堀内貞乃。東辰相。荒川清澄と俱ふ四個の老黨と。便室を招を寄せ。然而宣す。今來素藤が再叛の。賊徒大勢をとへども先度のとぞ食される人質の憂ひある。我速く打向す。那城を攻落し。素藤并み先黨と誅せん。と輪房翁。おせん。我身は昨今病着あれ。馬が乗れぬ不便へ然がと。我病着の瘥るを等あく。賊徒おのぞ勢ひ漏る。民の途炭不及せん。汝達各意見あらぶ。稟坐べ。を仰け。這回のまことに。楮數を定限す。是より下の話説。又卷を更めて。第一百十二回の解分を聽候か。

南總里見八犬傳第九輯卷之十終

